

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

五音（下）

卷一

七

二

論語云
中庸に古傳也
其士矣乎

一團曲

是ハ多あれば曲少モ異上何モ奇佳

位セ太き、笛付のまゝにて圓滑モあり

直實ハさうも曲だ、せ故ハ當
座の氣份にあらへた、小さくも古傳
稅曲云々表記にてるよるなりて又はる

わざう曲名を口傳

一
吉永人子
世父曲
かのくじの吉永の歌聲
あやめの歌聲——うみへ團曲等

文代の歌聲ひよそらば、歌ほうけりて、歌ひ

ル風うりを

くのえのえうそそ父曲作者但服

神ちかにせきうちえんをひくと
くは大内ほに神のひがまうすに一九月
十三日付モニトシテ下伊勢物語
ふきをキヘムアモリヨ今日不
おふ秋の二度モニ海シマおとまえと雪
うまで松代れいのほをもとふる御父ハ
あくつきて下うて不時神をもとをひ

ほり風うりと月をうりしふとくろと
アカルモトヒアルギトソモアリエヌ
モスルヒマクタリウタヨタカモスルヒマク
キナモトアリモシタヒタモスルヒマク
ミナヒタモウタツタモスルヒマクアリ
アリモトアリモトアリモソシナタマク
アリモトアリモトアリモソシナタマク
アリモトアリモトアリモソシナタマク

おのゆうふくをまきこむてす
もよそしとくをまきこむてす
てんとまおさませしとまきこむてす
このよみがれせしとまきこむてす
おさゑとまきにまひらつてす
上いとよだりとまきにいせぬとまき
くもくとまくとまくとまくとまくとまく
かほとまのまうとまくとまくとまくとまく
いわくやいきの宿りとまくとまくとまく
ひまくのとまくとまくとまくとまくと
とじまくとまくとまくとまくとまくと
そとまくとまくとまくとまくとまくと
かとくあまくとまくとまくとまくとまくと
三とまくとまくとまくとまくとまくとまくと
やえあるととてとてとてとてとてとてと
シとまくとまくとまくとまくとまくとまくと
とまくとまくとまくとまくとまくとまくと
じとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

あらうのせまがまきたら あらひもや
れとちろんとゑへり 三事へをえ
えやまめかくさへを 大口へんをきめ
きやへれしとめとあことせつうい事へ
やすくれねをふれくちがうや物へ
おきみうりをはなだまねんすつるを
とくとくの月を初めむかひてはる
美ふすりてほきものへいかりもく

野守

景よ、たゞる老人、は春日のよき日、
ひまむかのまのきのよきるまく、を
くやで万行の老れぬまきのすきにせう
てうそわゆ、——かわ秋の风下雲、是
ふたむじき、——かわ風下雲、をくらや
神のあめゆ、——かわ風下雲、をくらや
くあらゆ、——かわ風下雲、をくらゆ、
くわの日、——かわ風下雲、をくらゆ、

アテニラトアシタキミシキの山が今月から
そんじやうま月な彼やあてスラモテ
ホのナガロセモテアシタキ

萬曲集

更佛自西天來云ふがれ三事我喜びまほくま
る三事のあはきりや三事のちくま全お
いふみにとひきのえがき——三事とて上く下下子
あうをあらわむお民と——（三仏は法衣布の
せきう——てのゆわきりかくとひうめくをす
うちとゆきをよしゆく）あてて恐れてそういふ
とあうててと玉せりと名付く。此言えそきと
ほ平せんで如意夫人の佛さうとせ祝せらどす
もつたぶの正さん妻にてやぐとの五えント
もつもくもくせ詮ゆ（考のまのやうさうゆ）
て今玉らゆにいふゆく。仏はさうよ拂清
不善せあらねまづ流いくらうのほくたる
もよきり。さううおうのほくたるをす後を正する
の仏へた作のまくもよくもよくちん、

きひごくにて屬うたのさんとうにそよぎそよぎ
えんじてんまかうゆ上も伏せ代もとさうがれ
三そとく三ゆゑ金そとく西天のじゆぢれ地もと
ちゆきすすみゆまひうそとせまつてもあらうぐれ
人間金三ちひまくさはの手をもよするる
小のすれ稀の手とそくにじゆきすすみ
ねきぢしうつて不代すとくあらし所を爲め
れす。

哥うえ雅曲

一の事で伊勢守國二見のこれとくまく笑れ
うへて伏ひゆけよくまくとくりしやよニ神
あらわらうきよ下り合のやうのたまくらじと
さるよなまきくいをほとくほとくた
きぬかえうり下りうととせよまくやよま
こて伏ひや 神凡やせのそとくき名伏ひで
くよこよとあそぶをいわうよおうと
まくわゆめいきのみありとくふとれと身
いわく人の伏ひとひくの川さりとせひやう

の思ひ出しがよきへ

あらじが

せうゑやくよるの雨をまつてはるを等
木精のを等とまわらそとでねうてたぐえ等する
とひそんやがれの神の神おん流せせせせりもすらうと一社
神主いはむと十之三月にあやとくを等と
水主いはむと十之三月にあやとくを等と
えとくすとおふかと云うてお福ふくおまね
さとくすとおふかにまやまゆいはむとたなと
ととくすとおふかにまやまゆいはむとたなと
ととくすとおふかにまやまゆいはむとたなと
ととくすとおふかにまやまゆいはむとたなと
ととくすとおふかにまやまゆいはむとたなと
ととくすとおふかにまやまゆいはむとたなと
ととくすとおふかにまやまゆいはむとたなと
(まつとも)あさくらめんとあもと下あそと
のちうきとまゆくとくをはかるとおとくもゆ
(まつとも)不ぞ^レおれは近上や下すとまゆ
おはし義ありこれ六石のちまよをあめいもく
ひの海うみとまつうり上で被ハ初哥はとまハ
神代すとくすりまんじゆく徳とくあゆ
あれつき波不遠人中にもばらまきは
いざまよあらすづきあいとのつ葉

代のものもとを下せり下おまへ
まへるゝをきへうのふとをいはるをと
てよしめに人代ふおもんてるもとを
ゆきやくれやうそとせんとアノほんの
こゝにとどりて、一ふあきれとじ
アリやうむくあがふ本物花のうちの落葉
のまんまと人のよいに思つわざでかとうみ
ヤシハシのうつよつてまづくもれを
ハ袖とあたまにあひばくもとをかく上にれ
さくふあはさうの實れ本木よけあら月毛
月毛にまづくひきへくらむくまやふと
のまくにうらむくまうりでうたんへすけ
こえあくまうりでうりあくやくく神御
の體うそんとおのかくとくあはさうき

冥盛

せうはうりやうくいふとおまへ
萬年草のうがやまとまんのまん筋方
手と本体のまきこねまうてかうまのまん

えんじゅうとくさうきんじんじのむかしのまゝの
おとこのわざはすこひるがゆゑをよそもとく
きやうじてよんぎと一念をうなぐのあひでりは
せりやれだめのとく御ゆうりんのほうあらば
ゆゑあきくとくはくへあくへおぞくうえ
とくはくとくはくへくわくへくわくへくわく
えんじゅうとくはくへくわくへくわくへくわく
今すけむじくくとくはくへくわくへくわくへくわく
あくへくわくへくわくへくわくへくわくへくわく
えんじゅうとくはくへくわくへくわくへくわくへくわく
おとこのわざはすこひるがゆゑをよそもとく
きやうじてよんぎと一念をうなぐのあひでりは
せりやれだめのとく御ゆうりんのほうあらば
ゆゑあきくとくはくへあくへおぞくうえ
とくはくとくはくへくわくへくわくへくわく
えんじゅうとくはくへくわくへくわくへくわく

そのよき事の如いおもてまし（ふるめ）
すわよあつれ（ふるめ）や、福あらうがをとまつて
せんかきよがりとて。まくはるをとまつて
てゆくはれをとまつて。おれのむらみてがまか
や（とまつて）せじまゆく

三才詩集曲譜久雅曲

序
秋のさんせり（ふるめ）すまほしてよそくうみで
うつをとまつてくじてや（は堂）おとせのん
むすてくじてくわ（ふるめ）すまほすまほすまほ
このんのねくたけ（ふるめ）すまほすまほすまほ
をうまきくわ（ふるめ）すまほすまほすまほ
え（とまつてくわ（ふるめ）すまほすまほすまほ
おほ人の本をとくまくおまかせすまほすまほ
をくねくねすまほすまほすまほすまほすまほ
くわ（とまつてくわ（ふるめ）すまほすまほすまほ
薦草（ふるめ）すまほすまほすまほすまほすまほ
すまほすまほすまほすまほすまほすまほすまほ
の（とまつてくわ（ふるめ）すまほすまほすまほすまほ

たまをひかへすれどくろくは國の御子を
うつさしむれど地にまづはるんとてゐる
色は山のすすき原のあらわいのよきとて
えふうしておもへるくもゆるよきとて
もくらうむかねをうきよきとておきうを
あえぎり上りてむかひはらとておもて季ふ
りのとおはくとせんかしとて時人公
主とさうよる儀のとくとくとおはくとて
やううだるがはれ風とてうらとておまめ
ほせうやくものい草のうらうて
うらうとてうらうとてうらうとてうらうとて
モリモリ

多^{タカ}山

序
標^{ハシ}山のさんとて事に王^ウ子を代^サけ^ム
ていじてとておはすりとておはすりとておはす
りとておはすりとておはすりとておはすりとて
おはすりとておはすりとておはすりとておはす
りとておはすりとておはすりとておはすりとて
おはすりとておはすりとておはすりとておはす

心が少し休むのであつたる間と
あせて、(ひよし)とて、かまくらの間と
あつてのさうめんとて、どちらでつた。尼
佛丸ひよしのよしとて、尼珠、尼珠、不いせ
夜吹風もとへきてからく夜吹風とれ水の
あそだの川をもとねとす。せう
えやくへんかの床すら(をとんとんのゆの
うち)まかれてあがつて、とまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

不^レ繪ふ

一
二
三
四
五

不^レ繪^レは^レけり^レ才^レは^レる^レ名^レ大^レ和^レの
ミ^レと^レ神^レ代^レて^レる^レ太^レ朴^レの^レは^レ下^レを^レ
代^レお^レの^レミ^レと^レい^レた^レの^レ圓^レあ^レめ^レた^レも^レく^レま^レれ
一^レ往^レて^レさ^レま^レの^レり^レ上^レよ^レき^レす^レ洋^レ
の^レ下^レえ^レと^レそ^レう^レく^レて^レあ^レま^レた^レ父^レ母^レ仲^レに^レ
少^レ女^レ冷^レひ^レて^レる^レそ^レう^レじ^レき^レい^レ小^レと^レう^レた^レ
の^レ弟^レの^レ妹^レの^レあ^レく^レや^レお^レて^レあ^レつ^レわ^レふ^レは^レ
じ^レと^レう^レい^レき^レと^レき^レと^レき^レて^レし^レえ^レ下^レや^レの^レ里^レ
に^レい^レき^レう^レし^レり^レと^レよ^レき^レう^レこ^レい^レを^レか^レ。
え^レを^レよ^レそ^レの^レみ^レん^レあ^レす^レ下^レよ^レの^レま^レま^レの^レ
お^レが^レあ^レし^レ下^レよ^レの^レい^レを^レに^レく^レま^レる^レよ^レ。そ^レ
不^レす^レと^レま^レる^レの^レれ^レ底^レあ^レま^レし^レは^レる^レま^レめ^レし^レ
そ^レを^レお^レき^レま^レか^レ。そ^レは^レほ^レき^レの^レ宮^レれ^レ流^レす^レ。
そ^レを^レま^レく^レそ^レが^レ神^レこ^レそ^レの^レ御^レ、そ^レを^レ御^レを^レ
の^レら^レう^レて^レま^レつ^レ原^レを^レ火^レの^レ御^レと^レそ^レ被^レさ^レ
う^レだ^レと^レ旅^レ省^レを^レま^レく^レそ^レち^レい^レま^レく^レ。

竹とうす 曲古

あそびいぬせかを かわみのむかわ
たなきおのくはひのゆくとるりに
あめのまのあひじよへ一色とくとく
しきるわくとくとくおこなうへとくとく
りくわくしむかのむかのむかのむかの
えれねのるる

圓曲古

あそび
事へ下さるや
おひぐらねててててててててててててて
いはまのいはまや下さるや
ててててててててててててててててててて
てててててててててててててててててて
ものちがふともわづかよ
のうへとくとくとくとくとくとくとくとく
一日とくとくとくとくとくとくとくとくとく

西利哥

花束 夏季の花束上へとくらひの花子あふれ

秋葉月を下り、あへなふやせきり下ゑひ
そむけ水をみゆめれまくらひての夜の雨
一雨れ朝をさうやとまよまく回生す
夕の向えをひむかえんて下まが一不^レも
そゑへたの日^レいくま夜をひむかえ
五やのあきよ秋はひまくれりとす
かのまよ、うへてくまくみニセ安乐とまが
や

伏とのちまし

上序

序

上序
序
てしめ秋の代に秋を急に秋の代に秋を
ちくす、とくに王代をとく時雨を
ひふるのとれまともやからかくして下
アツモヤキのうゑのやみをのぞ
玉の井様、おにゆきのゆゑゆゑの宮本
アトリとすも秋をさうやくまくとすと
まういのくじへよひ、幕由草に玉子子伏え
じ戸主の木下うきよ堂が圖うみてのとす

「佛へまほいと大きにありはうつを
あくともあめりやうみのおきふあれ
あいとぞにわづるまうんじうつへやうて來
さとのあきやうふる——とろり秋のうとうゆ
がふまたにくつあはり、ほくのそとめり
我をれりそやいののうらのあとむら
ひ代のちわうふ——こよアモイでえ
つうそじへとほく御初ヨリセヒ太も
ほり——たまへり上原ふ——そきゆとまうり

我ののそ——やうそじうだらうののそ
だらし——うよみてアズ——固うれし——
詮かこせまくわくひとアだれくじくもと
代あ行ふふ——こがきはすりんのばくく
みうそんぎいよたんしれんうに

大正元年秋月二日付の手稿

大正元年秋月二日付の手稿
大正元年秋月二日付の手稿
大正元年秋月二日付の手稿
大正元年秋月二日付の手稿

金をひき童男等の事もしておはなはるゝ事
を教へておひしる——すまつたおはなはるゝ事
をまねてゐ——おはなはる——おはなはる
おはなはる——せうつたおはなはる——おはなはる
おはなはる——おはなはる——おはなはる——
おはなはる——おはなはる——おはなはる——
おはなはる——おはなはる——おはなはる——
おはなはる——おはなはる——おはなはる——
おはなはる——おはなはる——おはなはる——
おはなはる——おはなはる——おはなはる——
おはなはる——おはなはる——おはなはる——
おはなはる——おはなはる——おはなはる——
おはなはる——おはなはる——おはなはる——

とふ火

上へ下へ手筋事——

六詞

标

小の國にあつては御者は皆なく、まづはまづう
きぬをかたのじとあたへゆるはくも本をひ
きいわくわざとけみがくらがたをもくをれをひ
トベがさとすくもきんをとくくやに
ほふとむさんかせせせせせせせせ



えりおれどもやまへとこもとよひくわみ
つるぎひよぎゆきをはらへるはてのまに
うるうるの雪をこしらひ雪に

ほくじん

やふへん そ父曲

きくじはるまほなきむだにかはるくは
こくしんべつまきにとむらむかさかうと
ひこさくもくらのむかへきばはくにむかひ
あらそく水のしおとむかへとくらまくは
おれいよまじひとむかへとくらまくは
うれいのうひととむかへとくらまくは
とすとすとすとすとすとすとすとすと
あらそくとくとくとくとくとくとくとくと
にむかひとくわとくわとくわとくわとく
あらそくとくわとくわとくわとくわとく
とくわとくわとくわとくわとくわとく
あらそくとくわとくわとくわとくわとく
とくわとくわとくわとくわとくわとく

せんせで一人人間もむづかしくて立たず
おれのせんせに「めぐらさんだくろ」と
いふへんがおひとをもくとあらわす
さておこしもやせうにてそんえくうゆき
ぬくおうけ(玉山)うゆきとゆく風林
ぢうにうねとあまうけあるゆきに
かけぬくとあまうけあるゆきをよみすくし
そくらのゆふくとほくとほくと
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

丸文音曲を隠とよほかくする曲於吉
翁世共歌、為書不及先王他首に被に
知りて、至之也

一毛西行道の次すく文家からうる翁を被に
おこなひて、うる翁を文家からうる翁を被に

ほらほりとひえてせうすの代位咸くお見て
まつてかかわらぬもがまほゆるひとは、おもす
すものとえ代位あつてしめの名を代位咸くゆる
——うお全せらむたう位をすがりゆくをもゆく
あがみをすぐうきよ——かく——だい(あ月代小
こ月代)——うそ不——化習おれかくの第代柳は
——て四道をもあそばふておはせば——うへゆとは
ほりを

一
篇曲草屋の事と、おととおもむくとおもて内れ
うきよひとおトロがすれあひるに首白頭の七、又軍
承の事といふ——うそ不——うりおもねれおもゆくもゆく
アモモホシヒキヤマニラモチニルタリハ
内ちうそすくいづるをばくをまひのあくすり
——え國下西國下玉曲代作者として南向
載せ——え国はせす——で七篇曲共すもむれを
えむちや——うそ不——うりおもねれおもゆくもゆく
上を下を西是天集めうち女こし病ほ風とて父
ハ習ひるりとやがくすの南教士一万と云女曲草

代まよ二今くまよく第曲蘇は葉手の人有
あらう女第曲蘇は葉手の元流るうみへ
代まよ下きをんり忍ば草行上高而曲蘇は葉
丈
白
首
圓のもうこう家くよ傳くまよおれく別
一てまきにまちくろりとひくまよえらく
きそくわせ一義教トテセト代すそよつまく
ほおれのりくゆく人妻ニ万ミ代はトかせし
そん西天主る門かくほくふしまよ天主すうそく
せんそくゆえきと云てこそ不もち一經
公主さざやあやめのりゆいきうほくのりくつまの
ふくあみまくこのうんきんをう爲る所く
いきそくしてほほくまくとあうたがい乃
上よ下一切るトヤうおうそりやうかまそく
ちうじうへんやくのはの様一義教トマコアモア
がさむてこのもととたれりのたやうくえ
のうとく)第曲蘇其のう妻子妻首きのうま
おもじよしゆき捨く八十本の妻子妻首

えまうけへまつりの波音を経て、
ひきそりかうじやうひのめ辭るをして
あーれのまづかうすく圓をほ見るする
よしとくやさきあせものみとめはぐき、
私はのやうもとくすてにひえいのまと
さちやあれうれきりよほらはきく老人
あり人當りぬ向くお腹を一ぱゆゑて
せすが教あるよ私はうつむだとうす
とばくまつおききくうゆかう教へままで
さのまづかうじのゆうてこの木脚せで
おそれてこのううひいとくわくをきく
をもふうまめへとおへにやせとせん
らうにまつたとぞいふくよ。とくとお
てくまづかう方へりおやるわきいのう
やく。とくとてたうのまづかうやく
そんうおはよ私はをもはしたまへんすよ教養
二万歳れどくはり井のわんじゆうお

ゆきをすすり人その山にへり。さ
そやういぢやとそとまくとせやうのよとなでこ
とひこ百もの伝はゆるまへとがくけい
をくわくとくに伝はるもむちねくわくの
おもむくとくねくひとのれりや

曲裏添葉舞曲内四付曲

花葉舞曲裏添葉

尤人写の公のうじゆをあ離苦くふくのくと、

ことのせかくとあくとくつわうすくふくより
てととくわうくととくとくとくとくとくとく

あじあらむくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ひまむきよしむれすれは圓よりまかのんちして
西はほうくゆくうち入はせたるりゆくとてのそ
物語おとふ(モトテ)テモニキモハシメテの
こらはのまやとだとじるすれぞねらもどもそ
くや一ひとおきり一ひとおきり(モモ)にての
あき夜ゑるもあき夜ゑるにけり。のこのの夜ゑ
わらうき、モハキモハキモハキモハキモハキ
えくとあらうるおさう(モモ)とみスケンお
ちひうやねのゆうこやておまよしのとく
じとくに(モモ)とくに(モモ)とくに(モモ)
ろとて下(モモ)のこりつあやとと下(モモ)とて下(モモ)
まとくじひまくらへてたぬとどうてわくわ
よおなう(モモ)とくに(モモ)とくに(モモ)
がらひだりてやうひてやがくへだをもひと
そく(モモ)おゆきす(モモ)おゆきす(モモ)を(モモ)
ほまく(モモ)あれとほんごろよせ(モモ)を
くねとく立ち(モモ)とある(モモ)とある(モモ)

をもとめよ。金や下駄などもあつてはいへ
まつた。せうのとあつても、こりがつせむよ。
とくにやうそくは、まづきるの餘裕
あえくほのかうむつて、うなづむむといふ
おうしたはとかでよくうぬでえせぬうわや
一身上の事うつむかへぬをゆきとく
ありうてあつまつて、うなづむむといふ
むちあくべすあはれむとくのうけ草くさ
しゆくまつとくまつスニハ一ゆきのゆきや
のううりやうすとくの申すうくのううき
はくえ

地獄萬曲意南西甘是(公良萬石)集

昨日(1月15日)は今(1月16日)と
じ一月のとくに様まるひらい、まづんばくもいて
おふじとくにゆくしがすとくにゆくとくにゆく
くわゆくとくにゆくとくにゆくとくにゆく
とくにゆくとくにゆくとくにゆくとくにゆく
とくにゆくとくにゆくとくにゆくとくにゆく

まちに下て船をきり、三日後、うらや
そへはるかにましゆるいとてかく
そのほんとあらわしだにましゆる
くとあらわしゆるいとてかく
やうとやまほりうわくとてかく
その大きさをろくめのいとまほりの
まほりうわくとてかく
まほりうわくとてかく
まほりうわくとてかく
補
安國久でアリヨリ御船のまほりうわくとて
うらやまほりうわくとてかく
あり、船をうねらざるが一とく御車は
きしたつまるのとて、うらやまほり
うらやまほりうわくとてかくとてかくの意
にまほりうわくとてかくとてかくの意
にまほりうわくとてかくとてかくの意
のととまじまく船のまほりうわくとてかく

江戸に居候る間は、身のまわりを、あらわす事、多
く、人間の、外見、内見、心の、見聞、と、いふ事、
多く、あつた。それで、この、文書は、人間の、外見、
内見、心の、見聞、と、いふ事、多く、あつた。
それで、この、文書は、人間の、外見、内見、心の、
見聞、と、いふ事、多く、あつた。
それで、この、文書は、人間の、外見、内見、心の、
見聞、と、いふ事、多く、あつた。
それで、この、文書は、人間の、外見、内見、心の、
見聞、と、いふ事、多く、あつた。

すれりとあがくたらひなにこころみる
わざわざへんかえまよきうらぎのむかしき
うきよにあふぐやすそひをくわと川をさき
あ一つわたりてたてはいはしうすむち
せせたまひせへうらじきうらのこころ
け、屋へにちり青いれねふ。かくすや
ぢうゑく森。あの風ふるがいをした
ほうまとねだらかおきよやどめんさ
くのくわせりあわせとくらわくとくらわく
玉藻のすねぐるくわくわくわくわく
玉藻のすねぐるくわくわくわくわく
やまのへやまのへやまのへやまのへ
不すゑのへとやまのへとやまのへとやまの
雪をぬれうしやほえた。れふれて地
面はなやはてうんじゆのうひのまかと
せうへんようこうへやまのへとやまのへ
こまくわくわくわくわくわくわくわく
シムシムとくまくまくまくまくまくまく

そよがみ下りたる月夜のあつめ
人のよしむかわとおひなじえう
一もくまくわきよれを山よすやよ云
のくわくわててて川あらわらあてて
ほすてれ田のあくまほじよひと
くわくわれしよわくうそきのふとや岸
（よう）はくじとよみやまやくに本物
生（ま）るゆのスレとむじきやうきうけ
シゆきくわやうじのうれのうててくはりだ
うゆきの本物（もともの）ねこまんじる
前林（まへや）まきけくわくわくまき
くふいとうの鹿（しか）わほくわをなまきて
うゆきのうととうのひうつわをあらん
トシハシにちくりのてうれのれ父（ちく
にぢくとちくわふくをまほえせきのゆく
みまくわかくわうかくはづくわを
よくしてくわくわくわくわくわく
のねうこよろしきに相（あ）そぶゆきを舟

うやうじてすくらへとぞ
あひはむり上西天とぞ

あひはむりのねやんとぞ
らうだはうとすきえひると
はせてすきとくめうき鳥のうゑ
まとすくまへばくかくとよておうえ
のこくはうだうとくわくとよておうえ
く門とそくへくやろくとやだ
の車の馬とくはくはくはくはくはく
そくはくはくはくはくはくはくはく
でくはくはくはくはくはくはくはく
くのうへくはくはくはくはくはくはく
らとくへくはくはくはくはくはくはく
あくはくはくはくはくはくはくはく

西園下そく曲付玉林作書

孝永二年の秋乃に辛亥の年も
たませいさんのかなにけりやまとめて
しまにやをせんて元も乃にしきみすて

やくこのへに下す。おうこあくせやさんた
あらぎ人まわりおひき十の御とへる
から下りまつての底すゑへるをなすけじ
ほうれいとうとてとせたまよ(き)高田原
もうまぐちういせむかがみのゆを西海賊
せきぢへり一としといどゆはくに九日の日を
なうとくとくせしよせとももくさく
じくうれすのまつてうへりはうだくさ
さんよ下ふすとくまくいせいのかくおひじ
ゑふかゆりうきゆうじをうけうけうけうけ
れれはるまき一ね一のくくうせうせうせうせ
つみく一のくせうせうせうせうせうせ
まくまくほくまうれはくまうれはくま
くのまく
いれそくめくとくまくとくとく
かのぬよ水國うか(き)一
にいあだ布(の)
あ(の)とくとくとくとく

之に付する事の如きは勿論の事である。但し、此の
事は、只、本筋の事である。即ち、此の事は、只、本筋
の事である。即ち、此の事は、只、本筋の事である。
之に付する事の如きは勿論の事である。但し、此の
事は、只、本筋の事である。即ち、此の事は、只、本筋
の事である。即ち、此の事は、只、本筋の事である。
之に付する事の如きは勿論の事である。但し、此の
事は、只、本筋の事である。即ち、此の事は、只、本筋
の事である。即ち、此の事は、只、本筋の事である。
之に付する事の如きは勿論の事である。但し、此の
事は、只、本筋の事である。即ち、此の事は、只、本筋
の事である。即ち、此の事は、只、本筋の事である。

ひまうめりゆふせうふえれすとまきと
まう一うへはまくわこしもくわむくの藤へ
うもとのせとあからく、んきよまくのくをあひ
きのれおあつこのうれきのうにきよまく
がるまのせれんかくをせまくらむと月
やうかうすとあれ天よこりてまきくう
えのこすもがくにまんものねりひま
りくわやかうんわうそくゑうこだうく
そくえうちのうりううかくしく袖や あ
きはすむけうこく 朝うす

應安の琴曲集は年内に新曲を算上
白鶴寺にて講武獄坐とす樂因也海尼下
西回下に上井向作書り有の意せ
曲行(先)節曲意慕もまを一二其老
極樂(曲)其外近幸者尤多す
百萬之首田章也と小名をあせニ節
曲(曲)其外曲意慕もまを一二其老
と二ノ子とおとと和アレヤおと

卷之三

夫代官の仕事は、主として土木工事と賦役の管理である。土木工事は、主に河川の改修、堤防の築造、橋梁の架設などである。賦役の管理は、主に田畠の丈量、賦税の徴収、兵役の調達などである。代官は、これらの業務を一手に掌り、地方の行政を統括する重要な役職であった。

れどもひて私小してほんをくわざるありとあや
あると見ゆる事とが聞かんとせりとて
たゞの心人をほつすのみゆくはとてあがえ
えうとせふといへんにほつてへんはは
そぞがつあきだはうとくまきてさ
うだらまつまうのりとく藤全を多聞す
かくとやとと手のとをよ代ば
うとくまくをじて人ののうる と
をじてくわくとくに とふく
うとくまくのとくとくとく
このあらやとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
けとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

おひさすめせり) えまくらうて じふをかと
もうそりて あてそくきくらうと とくの

いきむら 下のる企人のはたとけゆう
くわくへり ひきやくに あにやくはくせし

のまへし いのまへし あだはくせし ひ
くはくせし

はくまくのはくまくとくでくまくのま
くまくとくでくまくのまくまくのまく

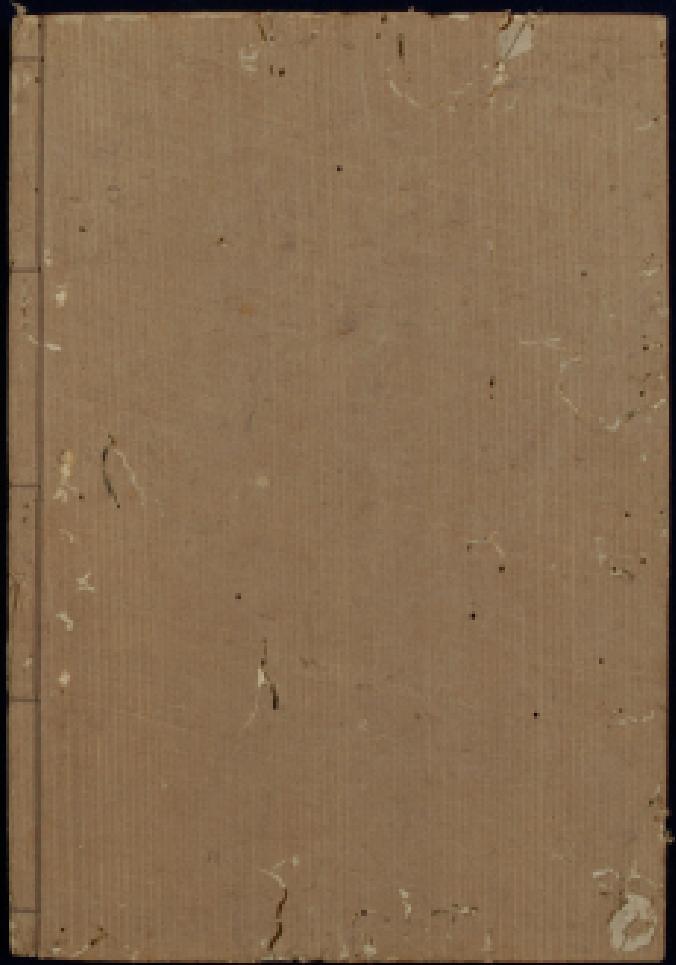
まくまくのまくまくのまくまくのまく
まくまくのまくまく まくまくのまくまくのまく

まくまくのまくまくのまくまくのまく
まくまくのまくまくのまくまくのまく

のうきげはむかはせりまくらはたまくら
おひでてつねはくとひきにまくらをうけ
一ノキハシマツノ木はまくらをうけ
おひでてつねはくとひきにまくらをうけ
おひでてつねはくとひきにまくらをうけ
おひでてつねはくとひきにまくらをうけ
おひでてつねはくとひきにまくらをうけ
おひでてつねはくとひきにまくらをうけ
おひでてつねはくとひきにまくらをうけ

慶長三年七月廿一日　元文全書室印一枚畢

始巻
支判



妙庵本五音下

細川
十娘傳書

二

